



全体スケジュール

2029年までに、3回の放鳥・モニタリングを行う計画です。

	2025	2026	2027	2028	2029
実施準備	施設設備等				
営巣環境設備	人工巣設置				
生息環境再生					
第一回放鳥	繁殖・飼育		放鳥・放鳥後モニタリング		
第二回放鳥		繁殖・飼育	放鳥・放鳥後モニタリング		
第三回放鳥			繁殖・飼育	放鳥・放鳥後モニタリング	



メッセージ



南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会 会長

鈴木 卓也

生まれも育ちも南三陸町志津川である私がイヌワシと出会ったのは11歳の夏、海辺から内陸に越える峠の上を悠々と飛ぶ姿を見たのがはじめてでした。以来、イヌワシも共に暮らせるふるさとを誇りとしてきました。

私たちのイヌワシの師である立花繁信先生は晩年、「自分より先に翁倉山のイヌワシがいなくなるとは」と嘆いておられましたが、同時に「このままでは遠からず日本のイヌワシは絶滅する。なにもせずに後悔するくらいなら、いまできることを試した方がよい」ともおっしゃっておられました。その想いが私たちの活動の原動力となっています。いまならまだできることを、東北の片隅の南三陸から始めたいと思います。

みなさまのご支援ご協力を心からお願い申し上げます。



公益財団法人日本自然保護協会 理事長

土屋 俊幸

日本自然保護協会は長年にわたり、豊かな森林生態系のシンボルであるイヌワシの保護に取り組んできました。これまでは、生息環境の再生を中心とした取組を進めてきましたが、繁殖成功率の低下とつがい数の減少には歯止めがかからず、イヌワシは絶滅の危機にあります。

そうした中で、多様な関係者と連携して準備を進めてきたのが、この『南三陸イヌワシ野生復帰プロジェクト』です。いま、世界ではネイチャーポジティブの取組みが各地で進められていますが、ここでは、広域の視点からのランドスケープアプローチがたいへん重要です。当プロジェクトはまさにその視点から進められており、日本初の取組であるため、不確実な要素も少なくありませんが、イヌワシの舞う日本の森を未来に引き継ぐために、ぜひとも進めていく必要があります。

皆様からのご支援とご協力をよろしくお願いいたします。



実施主体



南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会



公益財団法人日本自然保護協会



株式会社佐久

みなさまからのご支援が必要です

2029年まで、イヌワシ野生復帰を継続的に実施し、科学的なモニタリングをするためにはおよそ1億円の資金が必要です。

みなさまからのご支援をよろしくお願いいたします。

プロジェクトの詳細と経過報告、ご寄付については、Webサイトをご覧ください。



7月28日公開

空を舞う

イヌワシの姿が、

未来へのシンボルになる。

ネイチャーポジティブを

象徴する国内初の挑戦が、

南三陸で始まります。



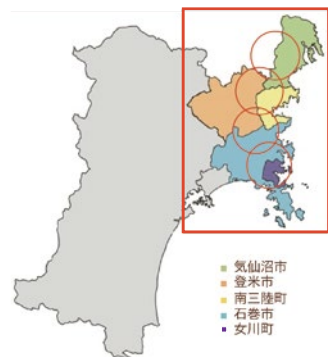
その飛翔は、人と自然との共生の証

INUWASHI AGAIN

南三陸イヌワシ野生復帰プロジェクト

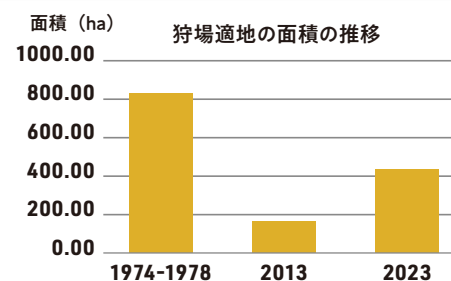
本プロジェクトは、環境省より、国のイヌワシ保護増殖事業計画に適合している旨の認定を受けています。

消失した南三陸のイヌワシ



かつて、南三陸地域（気仙沼市、登米市、南三陸町、石巻市、女川町）には4ペアのイヌワシが生息していました。その中でも翁倉ペアは、1955年に立花氏によって繁殖巣が確認され、国内3例目、戦後日本では初の報告という歴史をもっており、1976年には翁倉山城の一部が「イヌワシ繁殖地」として国の天然記念物に指定されました。しかし、2009年以降に南三陸のイヌワシペアは次々と消失し、2012年には翁倉山でのイヌワシの定着が見られなくなりました。

狩場に適した場所の減少と回復



翁倉ペアが生息していたエリアでは、1970年代は草地や伐採跡地などイヌワシの狩りに適した場所が約830haありました。しかし、その後の産業構造の変化、化学肥料の普及等により2013年頃には狩場に適した草地などが1970年代の20%弱まで激減しました。これが、南三陸のイヌワシが消失した原因とされています。しかし現在は、皆伐の増加により伐採跡地などイヌワシの狩場に適した場所が1970年代の50%強の440haまで回復しています。

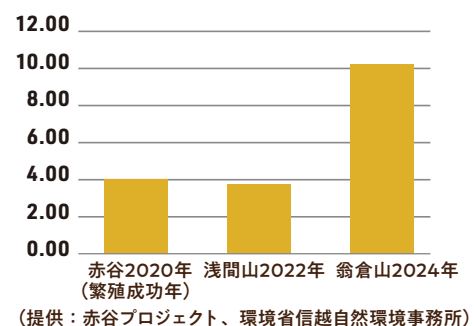
これまでの生息環境再生の取り組み

南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会では、翁倉山城の森林を管理する宮城北部森林管理署、登米市、南三陸町、株式会社佐久の4者で協定を結び、イヌワシの生息環境保全に資する森林管理を行っています。また、パタゴニアの支援を受け、ボランティアによるイヌワシの狩場となるような火防線整備を行っています。



火防線作業-五百峠間

餌動物の状況



翁倉山周辺の餌動物の状況を把握するため、2024年2月末からセンサーカメラによる調査を実施しています。調査では、ノウサギやタヌキ、ヤマドリなどイヌワシの餌となる動物が確認されました。ノウサギについて、現在イヌワシが生息し、生息環境再生を行っている赤谷地区（群馬県）、浅間山地区（長野県）と相対撮影頻度指数（RAI）を用いて比較したところ、翁倉山周辺は赤谷地区や浅間山地区の2倍を超える頻度でした。翁倉山周辺はイヌワシの生息に必要な餌資源が一定程度あるものと期待できます。

国内や隣接する岩手県でも危機的状況のイヌワシ

日本イヌワシ研究会の「全国イヌワシ生息・繁殖状況調査」の結果によれば、昭和56（1981）年以降2022年までに約65%のペアが消失し、現在は120ペアが生息するのみとなっています。繁殖成功率も1980年代に4割程度を維持していましたが、2022年には17.4%まで減少しました。また、南三陸に隣接する岩手県でも、つがい数は減少傾向であり、巣立ち雛数も2012年から急激に減少し、2024年にはゼロとなっています（岩手県HPより）。

南三陸にイヌワシを呼び戻すには野生復帰が必要

翁倉山周辺では、伐採や生息環境再生の取り組みにより狩りに適した場所が増加していますが、近年は翁倉山周辺でイヌワシそのものがみられません。さらに、隣接する岩手県における巣立ち雛数も激減しており、北上山地の生息地から南三陸方面への分散、定着も期待できません。こうした状況から、生息環境再生だけでは南三陸にイヌワシを呼び戻すことは非常に難しく、南三陸にイヌワシを呼び戻すには野生復帰が必要と考えました。また、放鳥した個体が隣接する北上山地に移動する可能性もありますが、それは、個体数や巣立ち数が減少している個体群への個体補強という効果があるとも考えています。

野生復帰の方法

野生復帰は、イギリスのサウススコットランドで行われている方法を参考にしています。

01 放鳥個体の確保



飼育下での繁殖 (秋田市大森山動物園情報誌より)

このプロジェクトでは、イヌワシの域外保全※として動物園で飼育しているイヌワシの雛を放鳥します。※環境省と日本動物園水族館協会(JAZA)は、動物園など安全な施設にイヌワシを保護してそれらを増やすことにより絶滅を回避する取り組みを進めています。

02 雛の飼育



撮影 Simon Dures

動物園で孵化した雛が自分で餌を食べることができるまで成長した時点で南三陸に移送し、野生に近い巣に似せた専用小屋に入れます。人の姿を見せず、野生の餌に近いものを与えるなど、なるべく野生に近い環境で巣立ちまで飼育します。

03 放鳥・モニタリング



撮影 Simon Dures

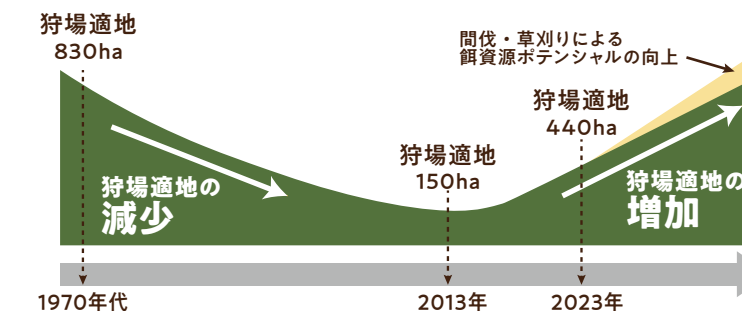
巣立ちの時期が近付いたら、雛の健康診断や追跡用の発信機の装着などを行います。放鳥は、小屋の前面の扉を開け、雛が自分で判断して小屋から飛び立つようにします。放鳥後は発信機や目視観察でモニタリングし、自立できるようになるまで補助的に餌を与えます。

営巣環境整備



放鳥個体の南三陸への定着、ペアリングを促すため人工巣を設置します。

さらなる生息環境の再生



イヌワシが生息できる環境の目標値を設定し、これまでの取組みを強化して生息環境の再生を加速させます。また、放鳥したイヌワシの行動解析、餌動物の定量調査等により、取り組みの効果を科学的に検証します。

プロジェクトの目標

まずは、3回の放鳥を行い日本における野生復帰技術の確立を目指します。その後、南三陸への再定着や隣接地域への個体補強を目指しプロジェクトを継続します。また、このプロジェクトで得た知見や技術を他地域へ展開することで国内のイヌワシの保護にも寄与することを目指します。